学生ウォーズ

法学部
法律学科 2年
廣中 大暉

一五〇人。何の数字だか分かるだろうか。就職がうまくいかないことを苦に自殺した三〇歳未満の若者の数である。この内の四一人が大学生だそうだ（二〇一一年警察庁調べ）。

世間の反応は様々である。ネット上では彼らに同情する人もいれば、精神の脆弱性を批判する人もいる。社会的な問題が彼らを死に追い詰めたのだという指摘もあれば、一五〇人程度なら取るに足らない誤差の範囲内だとの意見もあった。

兎にも角にも、この国には異常な閉塞感が漂っている。学生になってから、それを強く感じるのだ。先日、それを象徴するような体験をした。夏休みに、高校の部活仲間と集まる機会があった。皆、大学生である。自然と進路の話をする流れになったのだが、不思議なことに将来の話になると、どこか場の空気が重くなり皆の顔も曇る。未来の話をするときとは本来、明るく楽しいものであるはずなのに、なぜかこの場には、暗くどんよりとした雰囲気が充満していた。

一人は公務員になりたいといった。なぜかと理由を訊いてみると、たった一言「安定に勝るものはないから」と呟くように答えた。少し寂しい気持ちがした。この男はわたしの知る限りでは、チャレンジ精神に満ち溢れている人間だった。誰からも慕われるような立派な男だった。三年間、同じ部活でともに汗を流し、競争し、励まし合った仲間だ。何事にも目標を高く持ち、それに向かっていく努力を惜しまないような男から、安定のために公務員になりたいという話を聞くとは思いもしなかった。何か大きな夢を持っていたに違いない。それがたった数年の大学生活でこんなにも変貌してしまうものかと、強烈な体験だった。

驚くことに、なにもこれは彼だけに限定した話ではなかった。大学の友達や、昔の友達と将来の話をするときはいつもこんな具合になる。誰もが口を揃えて「安定、安定、安定」という。この国には異常な閉塞感が漂っている。それを感じずにはいられない。

わたし自身も、将来を思うと気持ちが沈むこともある。五年後、一〇年後の自分が見えてこない。何をしているのだろう、楽しく生きているのだろうか。つまらない人生を送っているのだろうか。やりたいこともわからず、未来が見えてこないという漠然とした不安がある。何か大きなことに挑戦してみたい気持ちもある。が、心の奥底で何かがブレーキをかける。挑戦するな、失敗するぞ。どこからかそういう声が聞こえてくるのだ。

我々学生を覆う閉塞感を生みだしているものとはいったい何か。未来を担うはずの学生らが挑戦する心を失っている。前途洋々、明るいはずの未来が閉ざされていると感じるのはなぜか。夏休みを利用して解明に努めた。前々から興味のある問題ではあった。それをこうしてはっきりと目に見える課題にして取り組むことで、学生が抱える不安を少しでも軽減できればという思いだった。本エッセイは、そんな私からの報告書だと思って読んでほしい。そしてこれを読んだ後に、不安を抱える学生を少しでも理解してもらえたら幸いである。

我々学生は卒業すれば各々の人生を歩むことになる。いよいよ、社会にデビューするのだ。具体的にいえば就職先を決めるということだ。社会に出るとは、すなわち、働くということである。大学を卒業したら就職することは当然。至極、当り前のことだろう。しかし、実のところ、誰しもが仕事にありつけるという確実な保障はないのである。ましてや、自分の希望を満たした職場で働くとすれば尚更である。意外にも、この当り前にも思える事実を知らない学生は多い。自分は何にでもなれる。根拠のない自信に支えられて、子供がプロ野球選手になりたいというのと同じ次元でものを語る。いまが楽しければそれでいい。自分の周りの人間を含め、そんな学生が増えている気がする。そしてそれが三年生になり、就活が迫り、学校にいわれるがままに自己分析に取り組んでみて初めて気が付く。自分が選べる世界はあまりにも狭い事を。そこには、働きたくても働けないという現実が、確固として存在しているのだ。

具体的な数字を出すと、毎年、全国からは約五〇万人の大学生が卒業している。企業からの求人は約三〇万人である。自然、二〇万人の学生は余ることになる。新卒での就職活動とは、とどのつまり、三〇万の椅子をかけて争う椅子取りゲームなのである。遊びでやる分にならば、椅子に座れなくとも痛くも痒くもない。しかし、それが人生の大きな要素を占める「仕事」をかけて争うものだとすると、どうだろう。血の気が凍らないだろうか。私は素直に怖いと思う。なぜもっと早く準備しておかなかったのか。社会に出る第一歩、これがいかに大切か、なぜもっと真剣に考えなかったのか。昨今は、就職してもすぐに離職する人が多いという。この言葉は、そういう人にこそ重く受け止めてもらわねばならないだろう。

ある人は、大学を出てすぐに仕事に就けなくても、その後でどうにでもなるだろう、と云う。しかし、日本の社会においては、そのことが限りなく不可能に近い事情があるのだ。

学生が就職活動に失敗する、それは想像以上に深刻な問題と成り得る。その理由は、日本独自の雇用慣行である、新卒一括採用至上主義にある。

新卒一括採用とは、企業が卒業予定の学生（新卒者）を対象に年度毎に一括して求人し、在学中に採用試験を行って内定を出し、卒業後すぐに勤務させるという雇用方法である。一見、学生は卒業してすぐに働けるということで、空白期間を生まないという理由で良い印象を持つのではないだろうか。企業側からしても、採用の容易さや、新入社員の教育コストの観点から考えると、良いこと尽くめに思える。しかし、物事は常に一長一短。この素晴らしく思えるシステムにも欠陥はある。就職活動を控える学生の立場から、新卒一括採用におけるもっとも重大な問題点を指摘しよう。

それは、学生にとっては、失敗が許されないということだ。日本の大体の企業は新卒採用によって、新入社員を雇用している。中途からの入社・転職者に対しての門戸はけっして広くはない。つまり、新卒採用からあふれた学生は、仕事に就く難易度がグンと上がることになる。少なくとも、自分の希望を満たした職場で働くことは、無理なのではないだろうか。職務経験がなければ中途からの採用もますます望みがない。仕方なしに、フリーターや派遣などの非正規雇用労働者と成らざるを得なくなるのだ。

脱落者の刻印は、あまりにも重い。日本の社会は敗者を救う制度もなければ、そのつもりもないのである。そのことが、我々学生を苦しめている大きな原因となっている。嫌な緊張感が生まれ、閉塞感が身を包みこむ。物事を保守的に考えるようになって当然ではないだろうか。失敗したく

ない。そのことしか考えられなくなる。無難に生きよう。倒産もリストラもない公務員になろう。多くの学生がそう考える。いまやなりたい職業ランキングの上位に必ず公務員がランクインするという。それほどまでに、私たちは安定を渇望し、失敗を恐れているのだ。

競争化社会や、格差のある社会を否定している訳ではない。余りたくなければ頑張るしかない。そうやって、一人ひとりが死力を尽くしているからこそ、社会は成り立っているとも云える。しかし、私が一番に訴えたいのは、失敗を認めないシステムの問題、ひいては精神の問題である。若者を取り巻くこの閉塞感を吹き飛ばすには、以上の問題を真剣に考えなければならない。

ここではその精神の問題について話す。前から常々思っていたことではあるが、日本の社会は失敗者に対して厳しく当たり過ぎではないだろうか。一つ例えを出そう、いま行われている自民党総裁選に立候補している安部晋三元首相（本エッセイ執筆時、平成二四年九月中旬）。二〇〇六年に首相に選ばれた彼は、翌年九月一二日、突如辞任を表明した。理由は様々だが、一つに健康上の理由で辞めたとも云われている。そんな男が再び、総裁選に立候補することを、世間は厳しく叩いている。一度、辞めた男が何をしにきた。また辞めるだろう。そんな声である。

私は政治のことはよく知らない。だから今の自民総裁選の話だと、誰が総裁になると政治がどう変化するのかも分からないが、安部晋三氏への厳しすぎる声を聞いて、少々違和感を覚えた次第である。政策や能力の如何の話ではなく、一度失敗した男を再度起用することなどありえない、と云った話で批判されている様を見ると、どうしても日本という国は、再チャレンジの精神とは無縁の様にしか思えない。一度、失敗したことは間違いない。しかし、その事実を真摯に受け止めて、再び決意を固めて総裁選に挑戦する、いわばリベンジするその姿勢には本来、敬意を表すべきではなかろうか。敗者を叩くのはそれほど面白いことなのか、よく考えてもらいたい。いまの日本では一度の失敗や挫折で、何もかもが崩壊する。再起の機会は与えられない。そんな国、恐すぎないだろうか。

なぜ私たち日本人は、これほどまでに失敗を恐れるのか。失敗者に対して、辛く当たるのはなぜだろうか。その理由は、古より続く日本独自の文化の影響によるものなのだ。「ハラキリ」「切腹」の文化。それこそが私たちから挑戦する気概を奪い、保守的な考えに貶め、失敗を許さない精神を生みだしている諸悪の根源なのである。かつて、この国の人達にとっては、失敗とはすなわち死に直結していた。一度しくじれば死んで詫びる。これが昔より日本の責任の取り方となっていた。結果、人々は失敗を極度に恐れ、無難に生きようとする。それでも失敗したら、あとは死しか残っていない。二度と挑戦する機会も気力も失ってしまうのだ。もちろん、今でこそ切腹という蛮習は残ってはいない。だが、その精神は想像以上に強く深く根付いているのだ。

日本は再チャレンジの精神とは無縁。故に再チャレンジのシステムなど存在していない。日本の雇用制度がそのことを如実に表している。新卒採用により雇用されない学生のことなど与り知らない。学生にとって、この事実はとても恐ろしい。

学生の視点から観る、新卒一括採用の負の側面とはこのような具合である。その後の人生は、企業からの雇用という点で考えれば、本人の努力次第で挽回できる機会は多くない。それこそが、学生を蝕み支配している閉塞感の正体である。結果、学生はチャレンジ精神を失い、無難に生きるために頑張ろうとしてしまう。やりたいことをするよりも、就職に有利というだけの理由で資格の勉強を始める。理念もなにもあったものではない。採用されたい。その一心だけで行動してしまう。なんと閉鎖的な世界だろうか。

人間は保守的に生きた方が幸せだ。それは間違いないことだとは思う。革新的な人間は、成功すればこそ幸福だが、失敗した人間の、その末路は悲惨である。世の中、誰もが成功できるわけではない。厳しい競争の果てに、敗れていった人も大勢いるのだ。一度レールから外れてしまった人生を元通りに戻すのは難しい。就職氷河期で就職に失敗し、フリーターや派遣での雇用を余儀なくされている人々。気持ちが折れてしまい、結局何の仕事にも就けずに歳だけを重ねてしまい、どこにも受けいれられなくなった人達。そんな話をテレビや本で見かけるたびに思う。失敗してしまった人達でも救われる世の中は訪れないものかと。失敗を経験してからでも、再び立ち上がれる。再起することが自然に思える。皆がそれを支援する。再チャレンジを推進する国にならないかと。

思えば、人が化けるタイミングとは、人それぞれではないだろうか。小学生の頃の友人で、速さの計算が出来なくて黒板の前で泣いていた彼は、今は旧帝大の理系でバリバリの実験生活を送っている。高校の陸上部の同期で、区では一番になれるくらい速かった彼は、中学時代はそれこそ悲惨なくらいに遅かったらしい。それがいつの間にか、急激に伸びたそうだ。本当に、人はいつ化けるのかわからない。神奈川大学の友人にも、家庭や経済的な事情から高校を中退し、働きながら学費を貯めて入学してきたという苦労人もいる。聞けば彼は、勉強が大の苦手で、それこそ受験勉強を始める時、英語は、Sunday,Monday,Tuesday, など、曜日の単語を覚える事から始めたと言っていた。普通、そこまでするかという努力を平然とやってのけたのだ。ある日、急にそれが好きになり、上手になることがある。人は誰しもが、化ける可能性を持っているのではないだろうか。それがいつなのかは誰にもわからない。しかし、これだけはいえる。いま述べたいずれの人間も、多くの失敗を経験したからこそ、今があるのだ。一人として、初めから優秀だった人間はいない。

いまこそ、大器晩成型の人間にも光が当たる社会が必要とされているのではないか。大事なことは、チャンスの輪が広がることである。チャレンジすることを応援する文化こそが閉塞感を吹き飛ばす。そうすれば、人は失敗を恐れなくなる。大きなことに挑戦する人もあらわれてくる。国も人も、大きく成長を遂げることができるのだ。

こんな話を聞いたことがある。自由の国、アメリカの話である。先ほど、日本の文化は失敗を許さない文化だと説明した。しかし、アメリカはその逆である。アメリカに暮らす人々は次の精神を共有している。「まずは、失敗してから来い」だ。そう、アメリカは再チャレンジの精神が、文化として深く根付いている国なのだ。これにはアメリカという国が辿ってきた歴史的な背景がある。アメリカは移民の国である。つまり全員、本国でうまく生きられなかった人々、失敗を経験した人達なのだ。だから失敗からの再生は当り前のこと。失敗しても再度挑戦する機会を与えられているのである。故に挑戦者は失敗を恐れない。何度でもチャレンジするタフさを彼らは持っている。失敗を経験した人間は強い。再び立ち上がろうとするガッツと、人間に従来備わっている学習能力とで、同じ失敗をしないよう修正がきく。多くの失敗を繰り返してこそ、大事は成るのだ。いわずと知れたバスケットボールの神様であるマイケル・ジョーダンも「失敗」に関して以下の言葉を残している。"I have failed over and over again in my life. And that is why I succeed"（俺は、何度も何度も失敗した。打ちのめされた。それが、俺の成功

した理由さ)。失敗こそ、成功の母である。そうしてついには、アメリカンドリームが名指している様に、大きなことを成し遂げる人々も現れるのである。この文化こそが、アメリカという大国の強さなのだ。いまの日本が目指すべき姿とは、このアメリカ的強さなのではないだろうか。

失敗しても大丈夫、次がある。この精神をみんなが共有し、社会に浸透すれば再生の道は開ける。再チャレンジの気運も高まる。しかし何よりも大切なのは人の心である。いくら再生のための環境を整備しても、精神が変わらなければ何も動かないし何も変わらない。結局は、世に暮らしている私たち自身の気持ちこそが、社会の命運を握っているのである。

私はこの夏を通して大きな夢を持つことができた。この国に再チャレンジの精神を根付かせたい。日本の鎖国的な制度は終わりを迎えるべきだろう。いつでも、いつからでも、いくつになってからでも人生はやり直せる。その言葉を現実のものにしたい。これからは失敗推進社会である。先にも述べたが、人は失敗を経験するからこそ成長する。そのことを決して忘れてはならない。上司は部下が失敗したら喜ぶぐらいの器量を持つべきなのである。失敗からこそ、化ける可能性は生まれるのだから。

人々が再生することを尊重し、意識し合えれば、挑戦する心が生まれてくる。闘おうという強い気持ちが生まれてくる。その為の制度も多く生まれてくるだろう。すると誰も失敗することを恐がらなくなり、前向きに生きていける社会に変わる。閉鎖的な世界から抜け出せるのである。人はいつ化けるかわからない。人よりスタートが遅れても、努力次第で追い付き追い越せる。それが理想の国家だ。

一介の学生にすぎない私だが、残りの学生生活でそれがどこまで実現可能なのか、可能性を模索していきたい。社会のためにも、そして何よりも、自分のためにも。日本の柔軟性のない雇用制度に異を唱える人は少なくない。まずはそこから、改革の可能性を勉強しようと思う。

以上、長々と駄文を書き連ねてきた訳だが、その過程で、一つ大きな発見をすることが出来た。それは、このエッセイを書き始める前の気持ちと、書き終えたときの気持ちがまったく違うということだ。エッセイを書き始めた頃は、鬱々としており、この世はなんと閉鎖的で嫌な社会なのかと、その愚痴を延々と語っていただけだったが、書き続けていると、次第に不満が怒りに変わった。第一の変化である。自身の抱えていた悩みを文にして可視化することで、自分が何を不満に思っているのか、よく実感できた。そして不満の原因が分かってくると、急に激しい怒りを覚えた。そもそもなぜ、こんな社会なのか。多くの学生が将来に不安を感じている。いいのか、それで。未来を担う若者が、未来を恐れてどうするのか。おかしいではないか、もっと開けた社会になれよと、いやに攻撃的な気持ちになっていた。興奮が鎮まってくると、次第に冷静さを取り戻す。このおかしい世の中で、自分が果たすべき役割は何なのかを考え始める。自身が抱える不満が、社会構造の欠陥によるものだと知ったとき、急に気持ちが晴れたような気がした、これさえ解決すれば、自分の人生は今よりも明るくなるかもしれない。そう思えた。怒りが鎮まり、希望に変わった瞬間である。そして、書き終えた瞬間には、希望は夢へと変わった。

多くの賢人は、自身の気持ちを書きとめることの重要性を説いているが、その意味が今回のエッセイを通してわかったような気がする。自分の気持ちと向かい合うとは、こういうことだったのか。

最後に、以下の話をもって、本エッセイを幕とさせていただこうと思う。

山はあまりにも大きい、大きさを測りきれないほどに。しかし、重要なのは、自分が登りたい山を知っているかだ。登山家は云う。どうして山に登るのか。「そこに山があったからだ」と。人間はみな、自分が登りたい山を探して歩き続けているのである。そして見付けることが出来たのならば、後はどう登るのか、それだけである。どこまで登っていけるのかはわからない。途中でくじけてしまうこともあるかもしれない。でも大丈夫、次がある。この一言から、走り出そう。